

# 第90回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十六年十一月二十日（土）  
場所 九段校舎本館二〇二教室

## 講演

東洋の叡智

東方学院学院長 前田 專 學 先生

## 研究発表

### 《国文学》

夏目漱石『一夜』論

博士後期課程二年 山 尾 公 彦

小説『一夜』は漱石が職業作家としてデビューする以前、明治三十八年夏、『猫』の前三分の一が「ホトトギス」に連載されていた時期に書かれた小品である。登場するのは正体のわからぬ三人、「真面目」で鹿爪らしく構えて登場する「髯ある男」、妙に達観したようである余裕をみせる「丸顔の男」、「男の心を惹」いたり男女の情に多少の拘りを見せる「女」。一座に会した三者の、俳諧風で洒落な会話が取り留めもなく動いていき、会話のキールである「髯ある男」の「夢」

の話も、遂に「中途」のまま〈忘却〉が訪れて終る。

しかしてんでに動いていたような三者の思いも、場の描写の末尾では一応の収束を見せている。そして「一刻を知ればまさに人生を知る」・「彼らの一夜を描いたのは彼らの生涯を描いたのである」・「人生を書いたので小説をかいいたのでないから仕方がない」と記されることにより、作品の世界が規定される。寝てしまえば「凡てを忘れ尽」すことが可能な「太平」の世界である。のちの『草枕』の「非人情」に通ずる世界であり、前期三部作以降の人間の業を真正面から見詰めようとした諸作品の対極に位置し、漱石の理想とした世界である。

### 《中国学》

王安石「萬言書」考

博士前期課程二年 酒 井 辰 哉

「萬言書<sup>まんげんしょ</sup>」とは、北宋期（九六〇—一二二七）、官吏が皇帝に上奏した政治改革についての意見書である。王安石（一〇二一—一〇八六）は嘉祐三年（一〇五八）に北宋第四代の仁宗皇帝に「萬言書」（正確には「上仁宗皇帝言事書」）をたてまつったが、これは総字数